

講義

デジタルアーカイブと長期保存— アーカイブは未来へのメッセージ

講師：小川千代子

講義の中心点は、アーカイブの未来について、デジタルとアナログを対比させながら、いかに歴史資料を未来へ伝えていけばよいのかという喫緊のテーマにあった。

コンピュータネットワークの普及により現代はIT時代といわれている。IT時代の記録の作成と保存は、必然的であるかのように電子記録によると考えられている。ところ

が、その媒体がどれくらい長期的な安定性があるかについての関心度合いは、はなはだ心もとないのが現状である。アナログアーカイブの500年、文書管理の30年といわれるなか、コンピュータ関連は5年が「長期」と認識されている。

さて、デジタルアーカイブは、歴史資料をデジタル化することにより、データベース検索機能の活用、コンピュータネットワークへの接続で世界規模での情報伝達と配信が可能であるという優位性が認められることに疑いはない。また、デジタル化という媒体変換により資料の保存、保全、複写などに整理することも長所のひとつである。

しかし、デジタル化は資料の均質化をもたらしたが、それはオリジナル資料の均質化ではなく、あくまでも本物であるオリジナル資料の[保存][保全]というニーズは不変であるとした。つまり、デジタル化が発達したとしても、本物はなくならないし、なくしてはならない。

今、ALM連携（文書館・図書館・博物館）が大きく叫ばれているのは、そういった問題を踏まえているのであるが、どの保存機関もデジタル化がどんどん進んできて、実際にはオリジナル（本物）保存に困惑しているのが現状ではないかということである。デジタル化が進んだとしても、オリジナル資料の保存に関しては強い連携を図り、相互に協力してアーカイブを未来に伝えていく使命を遂行することはいま重要なことである。

他方、アナログ世界に触れると、肉眼視できるという可読性が最大の長所であり、技術的な陳腐化は全くなく、オリジナルであるとその評価も高いといえる。ただ、検索性を求

めることはできず、物理的分量の増大に関してはデジタルと比較することさえできない。

今、デジタルかそれともアナログか、という結論を導くことは困難であると正直にいわなければならない。デジタルにしてもアナログにしても、不安な要素を多く抱えるなかで、重要なことは、これまで以上に記録を「意識的」に保存しなくてはならないということである。繰り返しになるが、現代の電子記録は、媒体の寿命、コンピュータのハード、ソフトの陳腐化、そして何よりも恐いのが、「保存する」ということへの無関心である。意図的な保存措置をとらなければ、電子記録は長くは持たないしマイクロフィルム化の道も閉ざされはじめている。

最後に、現代のデジタルアーカイブの隆盛は、まことに歓迎すべきである。だが、その利便性の恩恵を未来の世代の人々とどのように共用できるのか、ということをつねに考えていかなければならない。デジタルアーカイブには、光だけではなく影を抱えていることを忘れてはならない。

特別講義〈事例報告〉

建築資料を中心としたリアル／ バーチャルアーカイブの構築

講師：研谷紀夫

東京大学大学院情報学環では、4年前から、幕末から昭和にかけてとくに自然科学の分野の研究に貢献した人物を輩出した坪井家に関する資料の収集と整理を行っている。その一環として岩石学者の坪井誠太郎邸に関する建築資料のデジタルアーカイブの構築を行った。これはその事例報告である。

坪井邸には新築・増築に関する設計図、工事見積書・請求書・領収書などの貴重な書類が残されている。当時の建築の工法、使用部

材、費用の内訳、人員の配置などは歴史的にも価値を持つものであり、アーカイブの構築が求められている。

アーカイブの構築には、リアルアーカイブとバーチャルアーカイブという方法がある。前者はすなわちアナログであり、後者はデジタルを意味する。例えば、現物（リアル）の資料をその他のメディアに変換保存しても、メディアの劣化や可読機械の問題から、資料の閲覧が妨げられる可能性がある。オリジナルである現物資料の整理・保存をするリアルアーカイブが最も重要視されるべきことはいうまでもない。



講師 東京大学大学院情報学環 研谷紀夫 氏

そこで、坪井邸に関する現物資料のアーカイブを構築したあと、主として閲覧・利用を目的にバーチャルアーカイブ、すなわちデジタル化を進めた。これにより多様な形態の資料も、シームレスにアクセスが可能となり、歴史資料の比較・対象などが容易にでき歴史資料の研究が深まる。同時に、資料の保存と利用の関係にも連携が強まるものである。

坪井邸建築資料のリアル／バーチャルアーカイブについて残された課題は、次の3つである。資料の現状記録法を今後どの程度まで精密に行うか、建築資料保管庫をどのように確保するか、どの程度まで公開を促進するか、である。